

狭小集合住宅を生きる

—台北市南機場アパートメントにおける生活のかたち—

白 佐 立 *

PEI Chouli

Securing a Life in a Confined Apartment Complex

The Way of Life in Taipei's Nanchichang Apartments

This paper presents a case study of life in Nanchichang Apartments, a confined apartment complex in Taipei City that is reportedly under consideration for demolition. A lifestyle survey is used to examine how the residents utilize the limited space to create a way of life in a complex generally regarded as a slum.

The foremost challenge faced by the residents is securing enough space to accommodate an extended family or commercial activities. To solve this problem, the residents have resorted to four methods: construct a *pòá"-lâu-á* (loft), build a *chóng-pho* (raised floor), purchase a neighboring residence, and build an extended housing structure on the rooftop or under the eaves. The most intriguing method of securing accommodation and commercial space within a confined area was the construction of structures such as *pòá"-lâu-á* and *chóng-pho*, which allow the segmentation of space, in combination with creating additional space through means such as buying out neighboring residences (i.e., expansion of space). Conceived out of the residents' struggles to build a way of life in a limited living space, these ideas contain the residents' wisdom of life.

キーワード：台湾 集合住宅 生活のかたち 半楼仔 総舖

* 東京大学教養教育高度化機構

1. 問題関心と課題設定

本稿では、現在取り壊しを取り沙汰されている台北市の狭小アパートメントである南機場アパートメントを事例として、一般的には「貧民窟」と見られるような場に対して、住民たちがどういった空間利用をすることで生活を成り立たせてきたのかを考察する。

アジア太平洋戦争における日本の敗戦以降、東アジアには大量の人口移動が発生した。台湾においても、1945年から1947年にかけて在台日本人が内地に引き揚げ、また戦時中に日本の軍人軍属として動員された台湾人も台湾本土に帰還することとなった。そして中国大陆における国共内戦での敗戦に伴い、1949年に国民党が台湾に中央政府を移転して以後、1950年代半ばにかけて、中国大陆から軍人を中心とした人口が大量に台湾に流入することとなった。「外省人」と総称される彼ら流入人口は100万人前後であると言われている〔コルキュフ 2008: 50-53〕⁽¹⁾。他方、1950年代以降は台北の都市化が進行する中で、農民や漁民あるいは地方都市住民は陸續と台北に移住した。とりわけ1959年8月に発生し、苗栗県より南の全県市が被災し、30万人を超える被災者を生み出した「八七水災」以後、多くの人々が生計を立てるために台北にやってきた。

かたや中国大陆から、かたや台湾各地からやってきたこれら都市移民に対して、台北の住宅数は圧倒的に不足していた。彼らは生きていくためには、都市の未使用地に建てられたバラック＝違法建築で暮らす以外に方法はなかった⁽²⁾。台北市政府の調査によれば、1958年段階での「違法建築」は246ヶ所、合計23,543棟であったが（『聯合報』1958年5月2、3日）、1963年には52,887棟と、僅か5年間で倍以上に跳ね上がっている〔建築と計画編集室編 1969〕。政府としては、大量の移民による住宅不足を解決するために、そして「違法建築」を撤去するために、公営住宅を大量に建設する必要があった。本稿の考察対象である南機場アパートメントも1960年代から70年代初頭にかけて台北市により建設された集合住宅群である。

このような大都市における住宅不足は台北に限ったことではなかった。香港やソウルなど東アジアの他の大都市においても、戦後の政治・社会変動の中で大量の人口が流入し、都市移民の住まいとしてバラック群が形成されていた。そして、その後の都市開発の流れの中でバラック群が撤去され、住民は強制移住を余儀なくされた〔林・聶 2003; 加藤ほか 2005〕。その際多くの人口を収容可能な高層集合住宅が重視される傾向にあり、実際に高層集合住宅建設が推進されたが、高層集合住宅の建築計画の経験が浅い東アジア諸都市では、住宅不足の解決を第一義的目的としたことから、極めて狭小な住戸を提供する傾向にあった。南機場アパートメントの各住戸も相当に狭小である。

近年、建築学及び人文地理学を中心とする台湾都市史研究では、戦後の主要な住宅プロジェクトの検討が進められている。その中で南機場アパートメントは住宅政策あるいは社会制度設計上様々な問題があるとしつつも、建設当時は違法建築に対する解決策モデルとして一定の意義を有していたと評されている〔林・高編 2015: 46-52〕。また、建築計画学的観点からは、平面構成や構造技術の側面で、南機場アパートメントは台湾建築史における公営集合住宅の模索段階の住宅計画として位置づけられている〔曾 2008; 呂 2011〕。このように南機場アパートメントは歴史的価値を評価されながらも、竣工当時の入居者は元来違法建築に住む都市移民だったことや、一戸あたりの人口密度の高さ、「雑然」とした建築の外観などから、建設直後から近年に至るまで、

多くのメディア報道や研究において「貧民窟」と評され、実際台北市政府も度々南機場アパートメントの改築や環境改善の政策を提唱している〔周 2000〕。

だが、以上のような先行研究および台湾社会における南機場アパートメントの評価はおしなべて外在的なものであり、住民の生活を軽視し、彼らの生活の実態を捉えきれていない。これに対して、筆者は民俗学の議論から生活の立場に立った分析が必要であると考えに至った。以下ではまず本稿のアプローチを明確にしておこう。

2. アプローチと調査方法

住民の生活実態にアプローチする上でまず参考になるのが、戦後福岡市に流入し、定住していった朝鮮系住民の生活を捉えた島村恭則の研究である〔島村 2010〕。島村は従来の日本における〈抑圧と抵抗〉の構図で描かれた朝鮮系住民史や文化人類学における〈民族文化〉や〈民族のアイデンティティ〉といった枠組みでは朝鮮系住民の多様な生活事象を捉えきれないことを指摘した上で、人々の生活それ自体を直視しようとする立場から「〈生きる方法〉の民俗誌」を提唱している。本稿は上述のように外的な「評価」を避け、可能な限り住民の生活に接近を試みる立場から、島村のいう〈生きる方法〉、すなわち「生活当事者が、自らをとりまく世界に存在するさまざまな事象を選択、運用しながら自らの生活を構築してゆく方法」という概念規定が有効だと考える〔同上：31〕。

他方、建築人類学を標榜する佐藤浩司は、ソウルの集合住宅に暮らす李さん一家5人の生活空間を、実際に彼らの生活道具を用いて再現した展覧会を企画し、李さん一家の暮らしの再現を中心に、そこから現代韓国社会に暮らす人々の日常に関わる生活空間と出来事を紹介している〔佐藤 2002〕。この展覧会では一家の暮らしから韓国現代社会の都市生活を提示する一方で、展覧会のために生活財調査を実施しており、身の回りのものを一点一点撮影し、その持ち主との関係性を考察することによって、個性的な個人を描く可能性が論じられている〔同上；佐藤・山下 2002：25〕。佐藤の試みは〈生きる方法〉に対して生活財というモノからアプローチしているといえ、示唆的である。

これらを踏まえ、本稿では南機場アパートメント住民の〈生きる方法〉のうち、限られた居住面積の中で、住民が何をどのように選択し彼らの生活空間を構築してきたのかを、居住空間の利用方法に着目して論じることとしたい。それゆえに、生活戦略全般をあらわす〈生きる方法〉のうち、本稿では住民の空間利用を〈生活のかたち〉と定義し、それに注目した分析を進めていく。

そのための調査手法としては（1）住宅の実測、（2）ライフストーリー及び空間の使用方法についての聞き取り、（3）住民の生活への参与観察などの手法を併用した。（1）住宅の実測では内装や家財道具まで含めて、調査当時の現状を記録した。（2）聞き取りでは、実測した建築図面を利用しつつ、住民の入居当時から現在までの空間の使い方の復元を試みた。（3）参与観察では、廟の行事に準備段階から参加し、住民と共に旧正月の料理を作り、大晦日を過ごし、住民の生業（農作業など）を手伝うなど、住民の生活感覚を掴むことを試みた。プライバシー保護の観点から個人名は仮名にしているが、ライフストーリーから住民を特定することも不可能ではないことから、本稿に登場する全住民から掲載許可を得ている。

現地調査は2015年8月に3週間、2016年1月から2月にかけて3週間、3月下旬に1週間、

合計約 6 週間実施した。住民にアプローチする前に、第Ⅰ期、第Ⅲ期では自治体会長を訪問し、会長に紹介された住民に対して調査を実施した。第Ⅱ期では、後述するが以前から面識のあるキンさんに住民を紹介してもらい、そこから人脈を発展させながら住民にアプローチした。

なお、1980 年代以降、歴代台北市長は南機場アパートメントに対して様々な改善策を打ち出し、全体の建て替え計画も提案されてきたが、関係住民が多数いることもあり実施には至らなかった。しかし、柯文哲現市長は着任以降台北市を大改造するような様々な方針を打ち出しており、南機場アパートメントも主要な「標的」となっている。また住民サイドの改築派も積極的に建て替えを推進しているため、南機場アパートメントは数年以内に解体される可能性もある。このような現状において、生活空間としての南機場アパートメント、そしてそこでの住民の生活、集住する住民たちのライフストーリーを記録することは社会的意義をも有すると考えている。

3. 南機場アパートメント—調査地の概要

南機場アパートメントは台北市南西部の万華区と中正区を跨いだ場所に位置し⁽³⁾、「整建住宅」として第Ⅰ期（1964 年）、第Ⅱ期（1968 年）、第Ⅲ期（1971 年）に分けて建設されたものである（表 1）。整建住宅とは道路、堤防などの都市インフラを整備する際に、その建設予定地に建てられた違法建築の住民を立ち退かせ、新たに住宅を提供するために建設した住宅である。そのため竣工時に南機場アパートメントに入居した住民は、基本的には皆かつて違法建築に住んでいた人々である。南機場アパートメント各期の建築の特徴は以下の通りである。

①第Ⅰ期

22 棟からなる。2 棟が一对になっており、その間は室外階段で連結されている。この室外階段からそれぞれの住戸に入っていく。各棟には通し番号が振られ、対になっている棟には同じ番号が振られる（図 1）。1 号棟から 3 号棟は最も面積が大きい甲種（13.91 坪）であり、対となった 2 棟間の距離は約 8m である。4 号棟から 7 号棟は乙種（12.2 坪）、8 号棟から 11 号棟は丙種（8.65 坪）になっており、対の 2 棟間の距離は約 5m である。住民はしばしばこのスペースを利用して台所や物置を増築する。当初設計された平面構成は台所、バス・トイレ及び 1 つの起居空間のみから構成される。道路に面する窓の上には庇が設けられている。住民は下の階の住宅の庇を利用し、元々設置されていた窓の腰壁を取り払ってベランダを作ったり、あるいは壁全体を取り除き、外へ「増築」することも珍しくない（写真 1）。このような「増築」はそれぞれの住民が自ら行っているため、増築の方法、使用する材料、増築した年代などは多種多様である。

外部空間に目を向けると、4 号棟から 7 号棟の列と 8 号棟から 11 号棟の列に挟まれた場所（中華路 2 段 315 巷 5 弄）に南機場夜市があり⁽⁴⁾、道路の両側に露店や屋台が密集している。ここから飲食店や露店が隣接する路地に延びていく。距離的に近いからか、10 号棟 1 階の 3 戸と 11 号棟 1 階の 10 戸は露店及び屋台の準備のための空間と化している。

②第Ⅱ期

地下 1 階から吹き抜けの中庭を囲む平面構成となっており、中庭側に地上 1 階と地下 1 階を連結する車両用スロープが設けられている（写真 2）。当初の設計では 1 階は全て店舗（6.8 坪）であり、2～5 階は甲種、乙種、丙種の 3 種の異なる面積の住戸によって構成されている（表 1）。1 階は「店舗」ではあるが、台湾漢人には一般的に職住空間を分離する習慣がないため、実際に

は店舗兼住宅となる。なお、第Ⅱ期の建物平面は五角形であることから住民に「五角大厦（五角形のビル）」と呼ばれている。建物平面は外郭が五角形であるのに対して中庭は台形となっているため、それぞれの角は不規則な形の住戸となっている。建物外観は、第Ⅰ期ほど増築はされていないものの、各戸住民が窓に防犯用の格子窓を設置しており、道路側も中庭側も不揃いの外観となっている。地下1階の吹き抜け（中庭）には住民たちで整備した庭があり、中心にある初代住民により植えられた樹は今では大きく育っている（写真2）。

建物の外部との接続としては、1階の中庭を囲むように、4～5mほどの通路空間がある。また外道から中庭に入るための通路が5本あり、その入口はそれぞれ中華門、忠孝門、仁愛門、信義門、平和門と名付けられている。そして各通路の入口横に階段が設置されている。

住戸の構成は、2～5階は中廊下をはさんで両側に住戸が連なっている。住宅面積が限られているため、洗濯機、ガスボンベ、下駄箱などを中廊下に置いている世帯が多い。中廊下には自然光が届かないため暗く、また多くの物が置かれている。

表1 南機場アパートメントの建築概要

	敷地面積 (m ²)	住宅種類（上段：坪、下段：戸）				戸数	階数	棟数	社区名
		甲	乙	丙	店舗				
Ⅰ期	17,489	13.91	12.2	8.65	—	1,264	5	22	忠勤社区
		304	328	632	0				
Ⅱ期	7,575	12.5	10.5	8.5	6.8	579	5	1	忠恕社区
		64	132	236	147				
Ⅲ期	2,552	(12-14)	(10-11)	(8-9)	—	259	6	1	忠勤社区
		40	173	0	46				

注) 第Ⅲ期住宅の床面積は不明なので、1963年から1972年に建設された整建住宅の床面積基準を表記した（甲種12-14坪、乙種10-11坪、丙種8-9坪）

出典) [台北市政府研究發展考核委員会編1992; 呂2011] より筆者整理

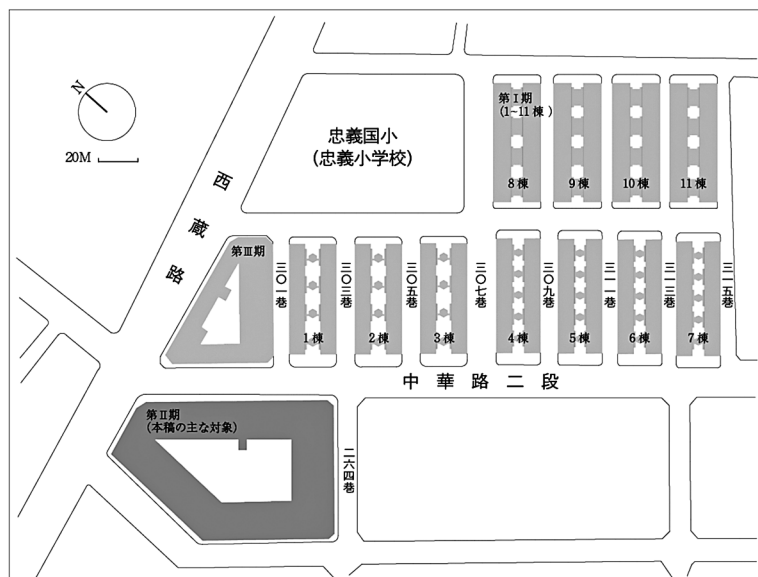


図1 南機場アパートメントの配置

出典) [台北市政府研究發展考核委員会編1992] より筆者作成



写真1 南機場アパートメント第Ⅰ期外観
出典) 2015年8月10日筆者撮影



写真2 第Ⅱ期中庭
出典) 2015年8月25日筆者撮影

③第Ⅲ期

平面構成は第Ⅱ期に類似しており、外郭は台形、中は地下1階から吹き抜けの三角形の中庭を囲む作りとなっている。全体的に規模は第Ⅱ期より小さく、地下階の中庭には植栽ではなく貯水槽が設置されている。三角形の三辺の内二辺は片廊下で、住戸には吹き抜け側から入っていく。残りの一辺には中廊下が配され、その両側に住戸が並んでいる。住宅の平面構成は第Ⅰ期、第Ⅱ期と同様に水廻り設備が設置されているのみで、竣工当初、他の内装や部屋割り等は入居者自身に任されていた。

4. 住民のライフストーリー—調査結果

本章では4つの家族のライフストーリーを取り上げ、彼らがどのように南機場アパートメントで生活し、限られた居住空間で生活してきたかを見ていきたい。なお以下では第Ⅰ期、第Ⅲ期に比べ、住民の定着度が高く、初代住民もしくは30年以上暮らしている住民が多く、考察可能な時間の幅が長いことから、第Ⅱ期の住民のみを取りあげる。

(1) 職住一体型の〈生活のかたち〉

事例1. 仕立屋のキンお婆ちゃんの場合（図2、写真3）

1階の中庭に面した場所で仕立屋を営むキンお婆ちゃんは1931年、台北県深坑郷（現新北市深坑区）で生まれた。国民学校を卒業した時にちょうど終戦を迎えた。その後中学校へ進学することはなかったが、仕事をしながら私塾で日本語を習い続けた。国語（中国語）は台北市に來てから話せるようになり、読み書きは30代に語学教室で修得した。実家は農家で、当時の台湾農村社会では女性に教育を受けさせる習慣があまりなく、彼女は生計を立てるため実家近くの仕立て職人に裁縫を習い、終戦の2、3年後、台北市内にある親戚の家に身を寄せ、布屋で仕事をした。その布屋にいた外省人の裁縫職人からさらに高度な技術を学んだ。そして布屋で出会った男性と1962年頃に結婚した。夫は南京市郊外出身の外省人で、職業軍人として博愛路にある施設に勤めていたため、博愛路と広州路の交差点近くにある煉瓦造の「違法建築」を5万円で購入した。当時、経済力がなかったため、所有権証明書のない違法建築しか購入できなかったという。

違法建築で暮らしていた頃に独立して仕立屋を営むようになり、住み込みの弟子もいた。そして子供2人にも恵まれた。

1967年、博愛路の違法建築群は撤去対象となったことから、翌1968年に初代住民として南機場アパートメント（第Ⅱ期）に入居した。違法建築時代の仕立屋の営業証明書を持っていたので、店舗として設計された1階に入ることが認められ、夫と子供2人と共に入居した。入居後も仕立屋の生業を続け、最盛期には4人の弟子がいた。これらの弟子は台湾の南部及び東部出身の女性であった。当時仕立屋を営むにあたって使う布やボタン、ファスナー、裁縫道具、新しいファッションを紹介する日本の仕立て専門誌などは、専門業者がバイクで2週間に1度店まで売りに来た。また、顧客は口コミで拡がり、近所だけでなく台北近郊からくる客も多かった。

アパートの僅か6.8坪の空間は、仕立屋を営みながら家族4人で暮らすには不十分であった。彼女は中庭に面した部分を仕立屋として使用しており、その後ろに台所とバス・トイレがあったが、職人に頼んで床面積の2分の1ほどを覆う半楼仔を造り、彼女と子供、女性の弟子の寝室として使用し、夫は仕立屋として利用していた空間で寝た。半楼仔とはロフト状の空間を指す。食事の時には、台所の近くに円卓を出し、皆で食卓を囲んだ。入居してから間もなく、彼女の店舗の真上（2階）の住民がその住戸を買わないかと打診してきたが、当初彼女は買おうとしなかった。だが入居してから3年がたった頃、階上の住民が別の場所に広い家を購入し、第Ⅱ期の住戸を売る段になって、彼女は近所の友人たちから資金を調達し、標会も利用して⁽⁵⁾、自ら階上の住民と交渉し、3万元で購入した。彼女は2階（10.5坪）の住宅を購入できたのは自分にとって最も幸せなことだったと振り返る。彼女は工務店に頼んで1階に設置していた半楼仔を取り壊し、1階の天井の一部をくり抜いて螺旋階段を取り付けてもらい、2つの住戸を連結した。そして2階の中庭に面した外壁を取り壊し、1階の騎楼（アーケード）の上の庇を利用して総舗を2つ設えた。総舗とは部屋に設えた揚げ床を指し、他の空間とは異なり総舗はユカ座であ

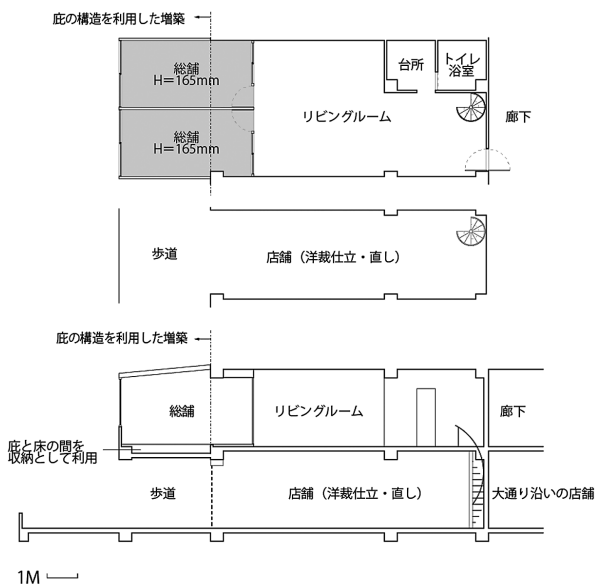


図2 キンさん宅平面図及び断面図
出典) 筆者実測



写真3 キンさん宅（中庭側より）
出典) 2015年8月20日筆者撮影

り、靴を脱いで雑魚寝ができる空間である。その後、3階の住民が転出する頃には、彼女には経済的な余裕ができていたため、直接その住民から住戸を購入した。なお現在は3階の住戸は賃貸に出している。

現在子供は既に独立し、また夫にも先立たれており、彼女は1人で暮らしている。毎日朝4時に2階の玄関から外出し、歩いて10分ほどの青年公園まで運動に行く。これは30年間欠かさず続けている習慣で、青年公園には一緒に運動する仲間がいる。彼女の趣味は山登りで、80歳を超えた今でも毎週日曜日に山登りのツアーに参加する。

子供や孫たちは最低2週間に1度は彼女に会いに来て、一緒に食事をしたり、出かけたりする。日曜日以外の日は朝8時に開店し、夕方6時に閉店する。今はサイズ直し、かけつぎ、ファスナー交換くらいしか仕事をしていないが、それでも毎日何人かの客がやってくる。客が来ない時は新聞を読んだり、大好きなNHKの番組を見たり、近所の住民とおしゃべりをして過ごす。夕方閉店した後は、螺旋階段から2階に登り、簡単な食事を済ませた後、総舗の上に置かれたベッドで寝る。数年前までは布団を敷いて寝ていたが、最近腰足が弱り、布団から立ち上がるのがきつくなったためベッドに換えた。彼女には元々特に信仰する宗教はなかったが、夫が亡くなってからは、2階に小さな仏壇を設け、夫の位牌を祀ることにした。だがそれも毎月旧暦の1日と15日に線香をあげるだけの簡単なものである。

彼女は初代住民であり、1階の中庭側に店を構え、住民がしばしばおしゃべりに来ることから、第Ⅱ期の住民の状況に詳しく、新旧住民ともにキンさんと知り合いである。情報量が豊富で、知的であり、筆者の調査趣旨を理解し、それに応じて第Ⅱ期の住民を紹介してくれたり、調査許可を取ってくれたりした。以下の事例2、3は彼女の紹介でアプローチした住民である⁽⁶⁾。

事例2. 社区発展協会のミエさん家族の場合（図3、写真4）

筆者が忠恕社区発展協会の総幹事のミエさんに出会ったのは信義門の近くにある代書屋においてであった。筆者の調査には第Ⅱ期の住民に詳しく、かつ住民からの協力を取り付けることのできる人が必要と考え、キンさんが紹介してくれたのがミエさんである。

忠恕社区発展協会は1992年に成立し、初代理事長はミエさんの義父（以下ジュさん）であった〔忠恕社区発展協会1994: 2〕。代書屋の隣に仕立屋があり、外観からは分からないが、代書屋と仕立屋は中で繋がっており、代書屋は道路側にある住戸にも繋がっている。この3戸（それぞれは6.8坪）を一家族で所有している。世帯主はジュさんである。ジュさんは1924年に中国の福建省福州で生まれた。1945年に台湾を接収するため、憲兵として台湾に来た。福州人は福州語を話せるが、多くの台湾人が使う台湾語（閩南語）は話せなかったため、閩南人の教官から教わった。1961年頃、遠戚のセンさんと結婚した。センさんは1935年に台湾の彰化で生まれた。父親は福州人で3才の時に福州に渡った。1949年に台湾の外祖母のいる彰化に戻った。福州にいた時には裁縫職人の父親にその技術を学んだ。結婚してから台北にやって来て、ジュさんと一緒に一月ほど中華路の鉄道沿いの違法建築に借家住まいした。その後、知人の仲介で博愛路の総統府の裏手にある木造平屋の違法建築を購入し、そこに10年間住んだ。センさんは父親から習った裁縫技術を生かし、博愛路の小南門近くにある違法建築に住んでいた兄が営む仕立屋で働いた。そして、数年後に兄の所から独立し自ら仕立屋を開いた。なお、その兄も第Ⅱ期の1階に居を構えている。

1968年、ジュさんとセンさんは初代住民として第Ⅱ期に入居した。入居当時の住戸は現在の

仕立屋の空間（A）だった。その頃は夫婦2人、子供3人と住み込みの職人3人で居住していた。空間の使い方はキンさん宅と類似しており、空間の一部に半楼仔を設置し、そこで子供3人が寝ていた。ジュさんとセンさんは作業台の上に、職人は床に布団を敷いて寝た。

仕事のスタイルはキンさんとは異なり、客が布を買ってきて、センさんは採寸して客が指定するスタイルに仕立てる。時には客の所に採寸をしに行くこともある。入居してから数年後に隣接する住戸（B）を購入し、仕立屋との壁の一部を取り除き、仕立屋を拡大した。新しく購入した住戸にも半楼仔を設置した。この時（A）の中心に仏壇が設けられ、ジュさんの先祖の位牌が祀られた。さらに数年後にセンさんの父親が同居することになり、（B）に隣接する道路側の住戸（C）を購入し、センさんの父親の居住空間にした。ここにもやはり半楼仔が設置された。

1980年代に入ると仕立ての仕事が減り、仕立屋の空間は本来の規模に縮小し、職人も1人になった。この時に、（A）と（C）はジュさん家族が仕立屋と住居として使用し、空いた（B）の空間は1984年にジュさんが代書屋を開くまで貸しオフィスとして貸し出していた。

1985年、ジュさんとセンさんの長男に嫁いできたのがミエさんである。ミエさんがやってきた当初、3室の半楼仔ともまだ寝るための空間として使われ、ジュさんとセンさんは（A）、長女は（B）、そして職人は（C）の半楼仔で寝ていた。台所は（A）にしかなかったのも、食事は入居当初からずっと台所近くに置かれた円卓でとった。

現在、ジュさんとセンさんは（A）と（C）に住んでいる。センさんはまだ現役で裁縫の仕事が続けているが、ジュさんは15年ほど前に引退し、代書屋と忠恕社区発展協会の仕事のいずれもミエさんに引き継いだ。空間の使用方法としては（A）は仕立屋、（B）は代書屋兼忠恕社区発展協会の事務局、（C）はジュさん、センさんとお手伝いさんの寝床となっている。ミエさんと夫は別の場所に住居を構えており、平日は毎日自宅から通っている。

（2）家族構成の変化に合わせて変化する〈生活のかたち〉

事例3. 世話焼きなユキさんの場合（図4、写真5）

ユキさんは1948年に新竹で生まれた。1975年に親戚の紹介で中国山東省出身の男性と結婚した。南機場アパートメントに入居するまでは台北郊外に借家住まいをしており、1979年に夫の同郷の紹介で第Ⅱ期の住戸（8.5坪）を購入、夫婦2人と子供2人で入居した。入居当時、室内は何の仕切りもないがらんだ空間であった。そこで彼女は知人に頼んで、2室に仕切ってもらった。その際、道路側の部屋に総舗を設え、玄関に近い部屋にはベッドを置いた。総舗には夫と長男、ベッドには彼女と次男が寝ていた。1988年頃、隣の住民が転出したため、隣の住戸（10.5坪）を購入し、息子2人の部屋として使用した。2戸の間の壁の一部を取り壊し、台所とバス・トイレを1個ずつ撤去し、2戸を跨いだ広い台所とバス・トイレに改築した。新しい台所は2戸の間の通路を兼ねている。さらに、長男の部屋にバス・トイレを新設した。なお長男は早くに独立したので、現在は次男の部屋となっている。そして1996年には、彼女は自宅でベビーシッターをすることになり、ベッドだと赤ちゃんが落ちて危ないことから、第Ⅱ期5階に住んでいた内装屋に依頼し、新しく総舗を設えた。2つの総舗の床の高さや総舗の下収納はユキさんが指定したという。

彼女の夫は2010年に亡くなった。それまでは夫の母親の遺影を飾っていたのみで仏壇を設けていなかったのも、夫の死後に夫の位牌を置くための小さな仏壇を設け、毎日線香をあげている。お盆と清明節、旧正月には夫の出身地である山東省の習慣に従って、饅頭と包子、そして夫

が好きな料理を作って供えている。彼女の長男は自分の家族を持ち、台北市から車で40分ほどの場所に住み、毎月一度は奥さんと2人の子供を連れてユキさんに会いに来る。彼らが宿泊するときは道路側の総舗に家族4人で雑魚寝するそうだ。次男は仕事のために海外を飛び回っているが、休暇の時には帰ってくる。また、次男の婚約者も時々泊まりに来るそうで、その場合は次男の部屋で寝るそうだ。

事例4. 4世代同居のリさん家族の場合（写真6、7）

調査を進める中で明らかになってきたのは、南機場アパートメントの中には3世代以上が同居する家族が多いことであった。住民たちも、これは南機場アパートメントの特徴ではないかと言う。南機場アパートメントの3世代同居は、3世代が一つの住戸に暮らすのではなく、家族が南機場アパートメントの中に複数戸を所有し、分かれて住まうものの頻繁に顔を合わせる居住方法である。家族によって晩ご飯は必ず一緒に取ると決めている場合もある。調査時点で第Ⅱ期で最も大きな家族はりさん一家である。りさん一家は4世代16人が第Ⅱ期内に4戸に分かれて住んでいる。家族員が多く複雑なため、便宜上家族をアルファベットで表記して説明しよう（図5）。

入居当時はAさんの母親、Aさんと妻のBさん、その子供5人、Aさんの弟夫婦2人、その子供5人、合計15人が入居した。Aさんの母親は台北郊外の三峡の出身であり、若い頃は茶畑で働き、そこの若旦那と結婚し、3人の男の子を授かった。

Aさんは1932年に長男として生まれた。Aさんの母は夫が早く亡くなり、三男は戦時中に行方不明になった。終戦後は生計を立てるために、AさんとAさんの弟を連れて台北に出た。台北にやって来た当初、現在の中山北路二段にあるザ・リージェント・タイペイ（晶華酒店）付近に農民から土地を購入し、数人が集まって一緒に木造の1階建ての長屋を建設した。Aさんは若い頃は人力車夫をしていたが、1968年に台北市が人力車を廃止したため、知人の紹介で工務店で働くことになり、そこで10年ほど働いた。中山北路の家は建築許可を申請せず、かつその土地は都市計画上の公園予定地だったことから違法建築と認定された。

1967年に中山北路の家が撤去される際、南機場アパートメント第Ⅱ期への入居が決定したが、撤去時点ではまだ竣工していなかったため、しばらく借家住まいをした。だが数ヶ月が経ったところで家賃の支払いが困難になってしまった。そこで管理人にお願いをして、建物自体の建設工事は終わっていたが、電気と水道がまだ開通していない内に家族15人で先に入居させてもらった。正式に竣工するまでは、子供たちが毎日近所で水を汲んできたそうだ。家族が多いため、2階の角にある台形をした平面の住戸（17坪）に入居する許可を政府から得ることができた。

工務店のAさんは仲間の職人に手伝って貰い、室内に3つの総舗を設えた。総舗aにAさんの母親、総舗bにAさん夫婦と子供5人、総舗cにAさんの弟夫婦2人と子供5人が寝た。台所にはコンロを2つ置き、総舗aと総舗cの間に食卓を2つ置いた。兄弟家族は別々に食事を取り、Aさんの母親は時にAさん夫婦らと、時に弟夫婦らと食事をした。2つの食卓の間の壁には小さな神棚が設置され、Aさんの父親の位牌と媽祖を祀った。Aさんの母親は毎日朝と晩に神棚に線香をあげ、毎月旧暦の1日、15日には第Ⅱ期中庭で紙銭を燃やし、旧正月やお盆、清明節などの日には料理を作ってお供えした。

入居して3、4年後、兄弟は分家することとなり、家を売却した。売却で得られたお金でAさんは第Ⅱ期の5階にある8.5坪の住戸を購入し、母親を含めての8人がそこへ引っ越した。そしてAさんの弟は外に転出した。8.5坪の家の窓側には広めの総舗を設えて、バス・トイレと台所

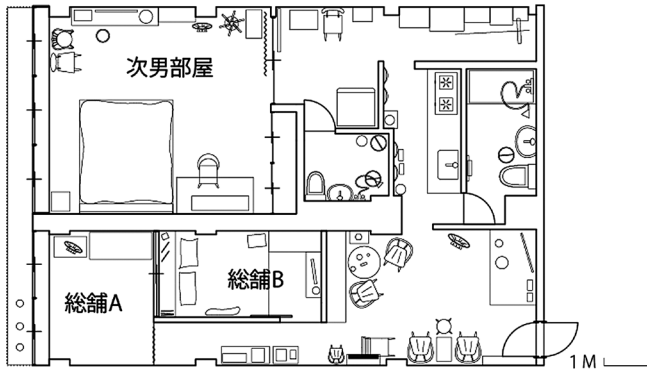


図4 ユキさん宅（実測平面図）



写真5 ユキさん宅の様子



写真4 ジュさん宅の半楼仔
（写真上部の小窓の付いた空間）

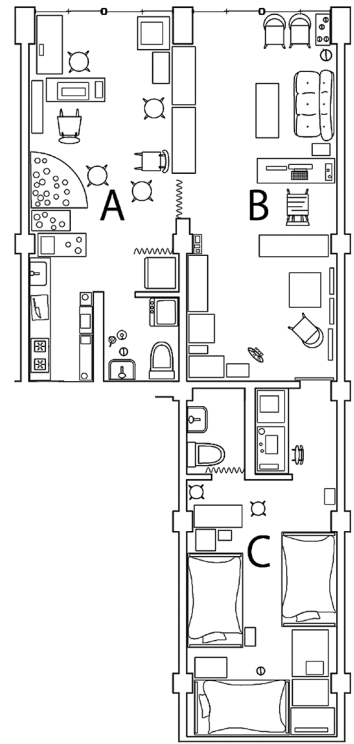


図3 ジュさん宅（実測平面図）



写真6 Aさん宅の総舗

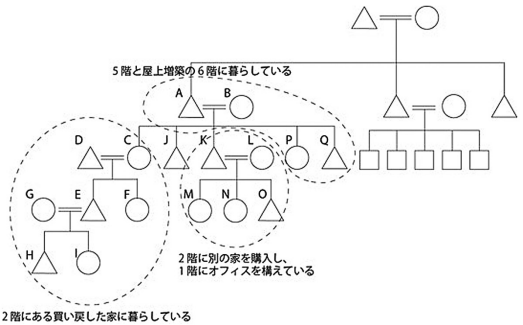


図5 リさん一家の家族構成



写真7 Cさんが買い戻した住戸

出典）図3、4：全て筆者実測。図5：聞き取り調査を元に筆者作成。写真4～7：筆者撮影（それぞれ2015年8月21日、同日、2016年2月1日、同年2月3日撮影）

の上に1坪ほどの半楼仔を設置した。AさんとQさんは半楼仔で眠り、総舗は他の家族の寝床となった。台所の前に置かれていたテーブルでは食事をしたり、子供たちが宿題をした。また前の家にあった神棚を搬入して玄関横の壁に設置し、従来と変わらぬ方法で祀った。その後少し経済的に余裕が出来た頃に、8.5坪の家を売却し、売却金に2万元ほどを追加して、8.5坪の家の反対側にある10.5坪の住戸を購入した。現在Aさん夫婦はここに暮らしている。

Aさん夫婦がこの10.5坪の住戸に入居した際、室内に前の住民によって3つの総舗が設えられていたので、それをそのまま使用した。ここでも以前の住戸のように神棚を設置した。1980年代前半には屋上に増築をした。最初は建築業者に依頼して1室作ってもらい、その後Aさんは工務店で技術を活かして屋上の部屋を徐々に自分で増築していった（合計約10坪）。屋上に部屋ができて空間の余裕もできたので、総舗の数を減らし、玄関を入れてすぐの所に壁を立て、その手前に大きな仏壇を設けた。現在、この住戸にAさん夫婦と未婚の次女Lさん、三男Mさんが暮らしている。

長女Cさんは20歳で結婚し、一旦アパートから出て行った。台北の郊外を転々としていたが、2010年頃に入居した最初の家の外窓に売り出し中の張り紙が貼られているのを見かけ、持ち主と交渉し、持ち主の希望した価格の9割の金額で買い戻し、アパートに帰ってきた。両親の近くにいたかったからだそうだ。この時買い戻した住戸は前の持ち主によって、最初に暮らした家とその隣の住戸が一体となったものであり（つまり2戸分、合計23.5坪）、ここにCさん夫婦と長男夫婦、長女、孫2人が入居した。

住戸の中には部屋が4室あり、うち2室には総舗が設えられている。リビングには仏壇が置かれ、Dさんの先祖の位牌と田都元帥が祀られている。本来、田都元帥は伝統芸能の守護神である。Dさんの出身地である宜蘭・南方澳にある廟でも田都元帥が祀られており、地方住民に篤く信仰されている。Dさんが若い頃、同郷の人々が重病を患った折、田都元帥の指示通りの民間療法を試してみたところ見事に回復した様子を何度も見たそうだ。この経験から自分も田都元帥を信じるようになり、結婚してからは自宅で田都元帥を祀ることにしたという。

他にアパートで暮らしているのは次男Kさんの家族である。Kさんは生まれてからアパートを離れたことがなく、現在は妻と子供3人が第Ⅱ期の2階に住居を構え、1階でIT関係の会社を営んでいる。Cさんはこの会社で手伝いをしており、忙しいときには妹のLさんも協力するそう。

5. 狭小空間を生きる方法—空間分析

前章で紹介したライフストーリーから、彼らが大家族であっても限られた空間で生活し、場合によっては商売までしていた状況が見て取れるであろう。狭小空間でいかに生きるかということ、空間の活用法という観点から分析すると、(1) 半楼仔を設置する、(2) 総舗を設置する、(3) 住宅面積を拡大するという3つの方法に大別できる。

(1) 半楼仔

半楼仔とは部屋の上部に板を張って作られたロフト空間である。台湾だけでなく中国南部などで、三合院や街屋など伝統的な漢人住居に倉庫空間として設けられることが多く、幼い子供の寝

床として使用されることもある。前章の事例1、2、4で設えられている。事例1、2は1階の住戸であり、店舗や作業場としての空間を確保するため寝室を設けず、寝床として床面積の3分の1から半分ほどの半楼仔が設えられている。半楼仔に上るには取り外し可能な梯子を使用する。半楼仔の床から天井までの高さは約1,000mmで、直立することはできない。就寝の際にはまず子供が梯子を登り、這って奥に入る。大人は最後に上り、一番外で寝るのが普通だそうだ。布団やゴザを敷いて数人で雑魚寝をするスタイルである。別の1階の住戸でも床を全面覆った半楼仔を設置している例が見られた。この場合は半楼仔の中に更に間仕切りをつけて「部屋」としていた。事例4の住戸は5階にあり、床面積に対して家族が多く、総舗を設えても空間が足りないため半楼仔を設えたという。

他の事例では、半楼仔を設けた多くの家は現在すでに子供が成人し、外で自分の家を構えており、家族が減少しているため、半楼仔で寝る住民は少なくなっている。その場合、半楼仔を収納空間として転用する家も多いが、半楼仔を撤去し、大工に頼んでベッドを設える事例も見られる。

(2) 総舗

総舗とは部屋にしつらえた揚げ床の空間を指す。総舗もまた台湾漢人の伝統的な家屋に見られる装置である。部屋の一部もしくは全面に床を張り、家族で雑魚寝をするという習慣は日本統治期に形成されたとされている〔青井ほか2007〕。上述の事例1、3、4に見られ、第Ⅱ期の他の住戸でも多く確認できた。

事例1の総舗の床面の高さは165mmであり、揚げ床というより住居の中にフローリング部屋を設けたといった趣である。事例3の総舗の床面の高さは約350mmで、床下は収納空間として使用されている。事例4のAさんが暮らした3つの住宅の総舗の床の高さはいずれも600mm、長女Cさんが買い戻した住宅の総舗の床の高さは300mmである。これらの住民はいずれも戦後に新たに建設された集合住宅の中に、家族の寝床を確保するために総舗を設置した。

これは、彼らが台北に来る前の生活経験、すなわち実家の三合院の中で総舗の上で寝たり、遊んだりした経験に由来するものと思われる。また台湾のエスニシティ関係から見て重要なのは、このような生活経験をもたないはずの外省人がこれを戦後台湾の都市住宅で経験したということであろう。なお青井哲人は、総舗が日本家屋の畳敷きの間に起源すると指摘するが〔同上〕、第Ⅱ期の住民の総舗の使い方を見ると、畳の間のようにちゃぶ台を置いて食事をしたり、お酒を飲んだりすることは決してない。食事は総舗を設えていない空間（イス座）でとり、ユカ座空間の総舗はあくまで就寝専用である。

なお、この市販のベッドより広い寝床（総舗）での就寝経験から、たとえのちに総舗を撤去して代わりにベッドを置いたとしても、2台の既製品のベッド（例えばシングル1台とダブル1台）を併置する事例も見られた。

(3) 買い増し、増築

半楼仔や総舗を設える以外にも、近隣の住戸を買い増したり、あるいは増築して延床面積を物理的に増やすという方法もある。事例1、2、3は買い増し、事例1と4は増築をしている。南機場アパートメントでは坪単価が低く、かつ1戸あたりの面積が小さいことから台北市内の他の地区に比べて購入が容易なようだ。新しい住戸を購入すれば、目下の面積不足の問題を解決できる

し、また資産ともなる。センさん曰く、「若い頃は少しお金が貯まるとすぐ家を買ったよ。家は一番の投資だし、安心できるからね」。キンさんも同様の見解であった。また、台湾人は分家をする際に男子に家を与える習慣があり、このために近所に新たに住戸を購入した住民もいる。

増築については、住戸の物理的条件に依存しているため、5階の住民であれば屋上を利用し増築することができるが（事例4）、それ以外の階では2階だと1階の庇を利用して少しの増築ができる程度（事例1）、3、4階だと奥行きのある出窓を付ける程度であり、一定程度の面積を増築で確保することは難しい。したがって、延床面積を物理的に増やす方法として、1階から4階の住民は買い増し、5階の住民は増築をするのが普通である。

6. 結論

本稿は南機場アパートメント住民の生活調査を通して、住民たちが限られた居住面積の中で何をどのように選択し、生活空間を構築してきたかを考察した。住民たちが狭小住宅で直面した問題は、大家族が生活あるいは商売をするための空間をいかに確保するかにあった。本稿では彼らがこの問題を解決する方法として、別の場所に引っ越す以外にも、半楼仔を設置する、総舗を設置する、近隣の住戸を買い増す、屋上や庇を利用して増築をするという4つの手法を用いてきたことを明らかにした。

特徴的なのは、狭小空間での生活空間、商業空間の確保のために、近隣の住戸を買い増したり増築するといった〈空間の拡大化〉を試みるのみならず、半楼仔や総舗の設置のように〈空間の細分化〉をも試みたことであろう。一般的に、空間の不足を解決する方法として〈空間の拡大化〉は容易に思いつくが、空間を拡大するにはまとまった資金が必要であり、元々違法建築に住んでいた南機場アパートメントの住民にとっては時間のかかる選択肢であった。そこで彼らが編み出したのが半楼仔や総舗の設置であり、限られた面積の中でも居室を半楼仔により垂直に、総舗により水平に分割することで生活（とりわけ就寝）のスペースを確保することが可能となったのである。このような〈空間の拡大化〉や〈空間の細分化〉の柔軟な組み合わせこそが彼らの生活秩序が生み出した〈生活のかたち〉であった。

このうち〈空間の細分化〉のための装置（半楼仔、総舗）は台湾漢人の伝統住居に由来するもので、彼らは自身のこれまでの生活経験から、伝統住居における空間の使用法を現代的な集合住宅に持ち込んだのであり、ここに彼らの創意工夫がある。注目すべきは、これらの手法は全て住民が自ら考え出したものである。単に伝統的な生活様式を現代的集合住宅に取り込むということであれば、韓国などでも見られることである。例えばソウルにおいて、1970年代半ば以後に建設された高層集合住宅は「居室がすべての部屋をつなげる動線空間の役割をなす」都市型韓屋の特徴を採用しており、またオンドルもしばしば設置されている〔南 2015: 60〕。だがこれらは建築設計の段階で計画者により導入されたものである。本稿で考察した〈生活のかたち〉は当初の建築計画の想定を越えた柔軟な住まい方であり、そこが重要であると筆者は考える。

なお本稿では住戸の内部に特化して議論をしたため、外部空間の使用状況、アパートにおけるコミュニティ形成の状況、とりわけアパートメント内の廟を中心としたそれを検討することはできなかった。今後これらを考察し、建設当初から現在に至る南機場アパートメント住民の生活誌をより立体的に描きだすことを課題としたい。

付記

現地調査を実施するにあたり、多くの住民にご協力いただき、また実測調査においては東京大学工学系研究科建築学専攻修士課程西里正敏、兵郷喬哉の両氏の協力を得たことをここに記し、感謝の意を表します。なお本稿は JSPS 科研費若手研究 B (No. 26820269) の助成を受けたものです。

註

- (1) 外省人とは日本の植民地統治の終結後に中国大陆から台湾にやってきた人々の総称。「外省人」と一括りにされるが、彼らの中国大陆での出身地、年齢分布などは多様である。外省人及び現代台湾におけるエスニシティ関係については [コルキュフ 2008]、[王 2003] を参照のこと。
- (2) これらのバラックは必ずしも土地を不法に占拠した自作の簡易小屋とは限らず、土地を借りて大工に建設してもらったもの、地主が都市移民に賃貸あるいは売るために建設したものなどがある。いずれも建築許可を得ずに建設されたため、違法建築と見なされている。
- (3) 「南機場」とは元来「南の空港」の意であるが、その後地域を指す名称となった。アジア・太平洋戦争中、松山空港（現在の松山機場）だけでは不十分であるとの理由から、万華にあった練兵場周辺の農地を収用し、予備の空港として馬場町空港を建設することとなった。この馬場町空港は、台北市北部に位置する松山空港に対して、台北市南部に位置することから「南機場」と呼ばれるようになったのである。戦後、南機場全域は国防部に接収されたが、海拔が 8m を下回っており、台風が来る度に浸水するため、都市計画上では建設禁止区域とされた。それでも 1948 年、空軍が軍属の住宅問題を解決するため同地域に 100 戸の住宅を建設したことで、これ以降、南機場地区は住宅地へと変容を遂げていくこととなった [龍・范 1967: 10-15; 欧 2008: 138-140]。
- (4) 「夜市」ではあるが、実際午前中のみ、あるいは午後から夕方にかけて営業し、夜は営業しない店もある。
- (5) 標会とは一種の互助会で、参加者が定期的に特定の場所に集まり、入札形式で相互に資金を融通しあう。
- (6) 他にもキンさんの紹介で調査を実施した住民は複数いる。キンさんは決して無作為に選んでいるのではなく、長く住んでいる住民やキーパーソンになりうる住民を選択し、紹介してくれた。第Ⅱ期での調査は住民の信頼を得るまでに時間がかからなかったのも、キンさんの紹介が功を奏したと言える。

文献

- 青井哲人・角南聡一郎・陳 正哲・張 亭菲 2007「台湾漢人住居にみられる〈総鋪 chong-pho〉の調査研究—日本植民地期以降の〈眠床〉—〈和室〉の結合とそのゆらぎ」『住宅総合研究財団研究論文集』34
- 王 甫昌 2003『当代台湾社会的族群想像』群学出版社
- 欧 陽杰 2008『中国近代機場建設史（1910～1949）（下）』航行工業出版社
- 加藤光一・李 浩・中川洋介・南 垣碩 2005「韓国無許可定着地（スラム）の形成と解消に關する実証的研究—再開発と低所得層の居住運動」『住宅総合研究財団研究論文集』32
- 建築与計画編集室 1969「台北市違章建築的研究」『建築与計画』3
- コルキュフ、ステファン 2008『台湾外省人の現在』（上水流久彦・西村一之訳）風響社
- 佐藤浩司 2002「生活財調査—ものはなにをかたる」国立民族学博物館編『2002 年ソウルスタイル

—李さん一家の素顔のくらし』千里文化財団

佐藤浩司・山下里加 2002『普通の生活—2002年ソウルスタイルその後 李さん一家の3200点』INAX出版

島村恭則 2010『〈生きる方法〉の民俗誌—朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究』関西学院大学出版会

周 素卿 2000「台北市南機場社区貧民窟特性的形構」『地理学報』28

曾 光宗 2008「南機場第一期国宅之規画歷程与住宅单元初探」『建築師』406

忠恕社区發展協會編 1994『台北市万華区忠恕社区發展協會第二次會員大会大会手冊』忠恕社区發展協會

南 根祐 2015「ソウル高層集合住宅の展開とアパート暮らし」『日常と文化』1

龍 冠海・范 珍輝編 1967『台北市古亭区南機場社区調査総報告』国立台湾大学法学院社会学系

林 雲峰・聶 志 2003「規画与空間配置」楊 汝万・王 家英編『香港公營房屋五十年』香港中文大学

林 秀豊・高 名孝主編 2015『計画城事—戦後台北都市發展歷程』田園城市文化

呂 理維 2011「台北市南機場整建住宅規画歷程与住宅平面型態之研究」中原大学建築学系修士論文